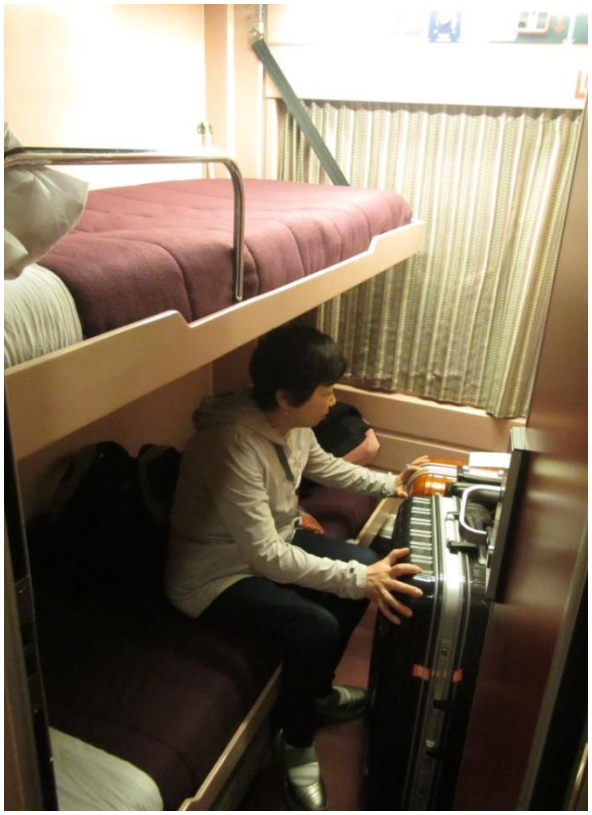
１３．国際寝台列車ルジタニア号

ポルトガルとは一旦さよならをして、これからスペインを目指します。ポルトのカンパニャン駅を２２時ちょうどに出発。２３時２１分コインブラ着。そこでリスボンのサンタ・アポローニア駅からやってきた憧れの国際寝台特急ルジタニア号に乗り換えて１１時３７分にコインブラを厳かに発車しました。



確かに出発は厳かでした。わたしたちはキャビン・アテンダントに案内されるでもなく、日本の一昔前に駅にいた赤帽さん（ポーター）に、荷物を持ってもらうわけでもなく、自分たちで乗車券に書いてある車両に乗り込み、自分たちの部屋に落ち着きました。

予約したのは２人用のコンパートメントですが、寝台はご覧の通り狭く、トランク二つを置くと身の置き場もありません。これにシャワー室とトイレが付いているのですが、安手のビジネスホテルのユニットバスと変わらない広さです。わたしのサイズではシャワーを浴びるのも窮屈です。

ベッドの上段に上がるには、ベッドと反対側の壁にはめ込まれてあるステップを引っ張り出して使うんですが、スッテプが出ている間は、通路をふさぐため動きが取れ

ません。試しに上から覗くとこんな感じです。画面右上の赤い扉がユニットバスへの入口です。まあ、もう真夜中です。食堂車は営業終了しているし、とにかくシャワーを浴びて、ポルトのスーパーで買ったワインとおつまみで「憧れのルジタニア号」乗車の祝杯を挙げ、寝ることにしました。狭い上にすさまじく揺れるため、シャワーを浴びるのも大変ですが、ちゃんとお湯が勢いよく出るので我慢です。中クラスのビジネスホテル程度のアメニティが備えられていましたが、その中にオーデコロンの小瓶も添えられていました。さすがに欧州寝台特急ですね。

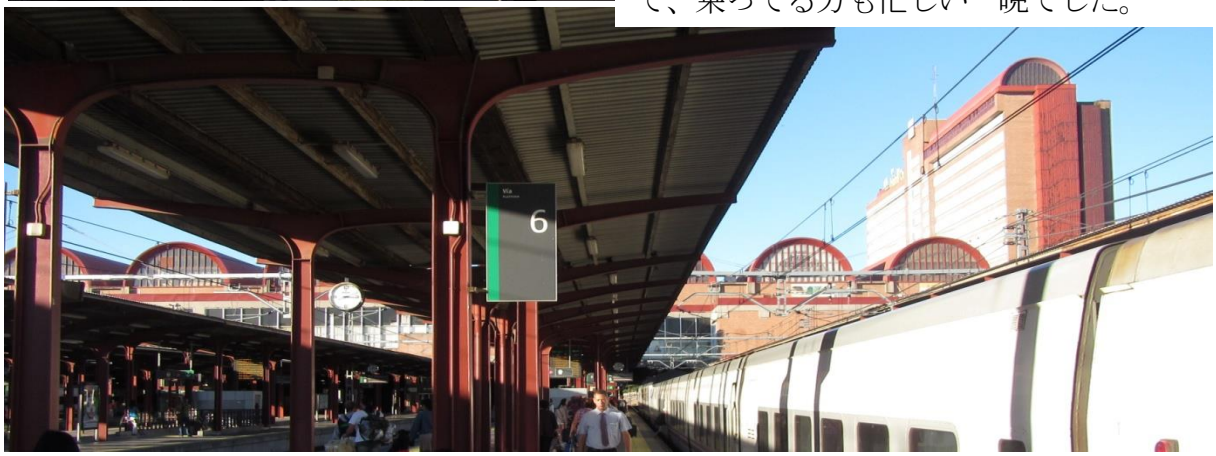
ルジタニアとはイベリア半島がまだ蛮族の（ローマから見て）の故地だった時代に、半

島の東側に住んでいた民族（ガリアの１部族？）の名前であり、紀元前１世紀にシーザーのガリア平定によって、ローマ帝国に吸収された時の属州名でもあります。

ルジタニアという名前にはどうも悲劇の印象が付きまとうのですが、１９１５年にもルジタニアと名付けられた英国の客船がＵボートの魚雷攻撃で撃沈されるという、悲劇が起きています。その時に他の乗客千数百名と共に死んだ百数十名の米国人がいたことで、米国世論が第１次世界大戦に参戦する方向に傾いていった、そのきっかけになった名前としても有名です。

さて、ルジタニア号の乗り心地です。憧れのリスボン特急でしたが、乗り心地は微妙でした。変な日本語とまずお断りして表現するならば「期待していたよりも快適で、覚悟していたよりも酷かった」となります。特に揺れは想像を絶するものがありました。おそらくは国境地帯の山岳地帯を縫って走っていた時だろうと思うのですが、縦横斜め・上下左右あらゆる方向から攻めてくるだけでなく、全くリズム感がありません。時として大太鼓の行進が続くと思えば、しばらくすると小太鼓の集団がやってきます。それが足並みもリズムも滅茶苦茶なのです。「折角載せてやったんだ。眠らせてなるものか」と決心しているかのようです。日本のブルートレインのように、規則正しいリズム誘われて、いつしか心地よい眠りに入るなどという心優しさなど微塵もないのです。

疲れて眠り込みそうになったと思うと、遊園地の飛行塔のような遠心力で振り回されたり、ジェットコースターの最初の昇りがあったと思ったら、コルクスクリューを通過したような無重力感を味わったりで、乗ってる方も忙しい一晩でした。



期待した朝食は食堂車が営業しておらず、ビュッフェだけです。コンティネンタル・スタイルの朝食セットと言えば聞こえはいいのですが、まあ、一昔前の日本の喫茶店のモーニングセットというところでしょうか、注文すればステーキかハンバーグは焼いてくれるという事で、ステーキを頼んだのですが、それさえ皿ではなくパンに挟んで出てきました。

ところでわたしはつい「リスボン特急」と呼んでしまいましたが、ポルトガルには「リスボン特急」などという呼び方はありません。確か１９７２年にアラン・ドロンが主演した「Un flic」というフランス映画の日本での題名が「リスボン特急」でした。リスボン特急とはその頃パリとリスボンを結んでいたらしいのですが、今は走っていません。だからわたしの乗った列車は「国際寝台特急ルジタニア号」なのです。

とにかく列車は無事マドリッドに到着しました。ただし着いたのはマドリッドの中心アトーチャ駅ではなく、西北部方面専用のチャ・マルティン駅です。まあ、東京駅ではなく上野駅に着いたという感じでしょうか。ただし、わたしたちのホテルはアトーチャ駅、東京駅の真ん前です。

乗車した時は真っ暗だったので、到着してから初めて「わが愛しのルジタニア」の姿を見ました。６両連結の電車で、カラーは違いますがフォルムは何となく日本の北斗星や北斗七星に似ています。日本と欧州ではレール幅（ゲージ）が違うはずなのですが、寝台列車というのは突き詰めるとそうなるのでしょうか。チャ・マルティン駅も欧風のクラッシックとモダンが融合していて、美しい駅でした。そこからアトーチャ駅の前にあるホテルまでは、タクシーで１５分ほどでした。